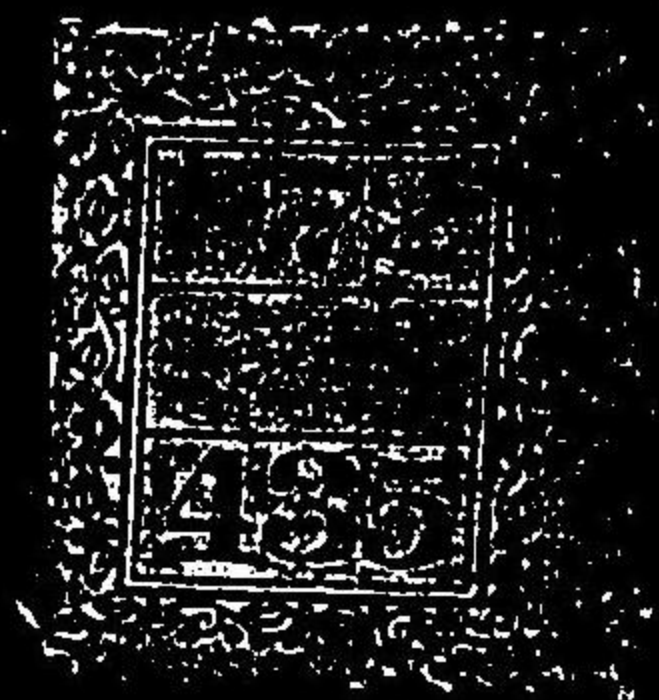


采風



085240-000-1

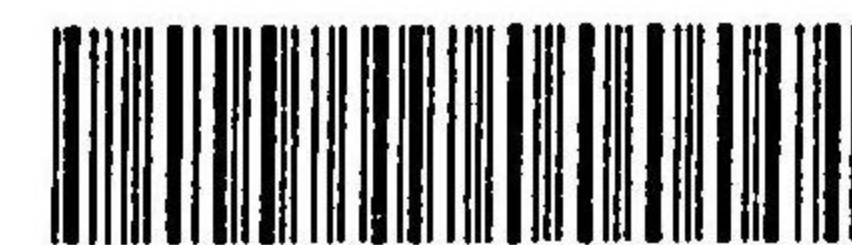
72-435

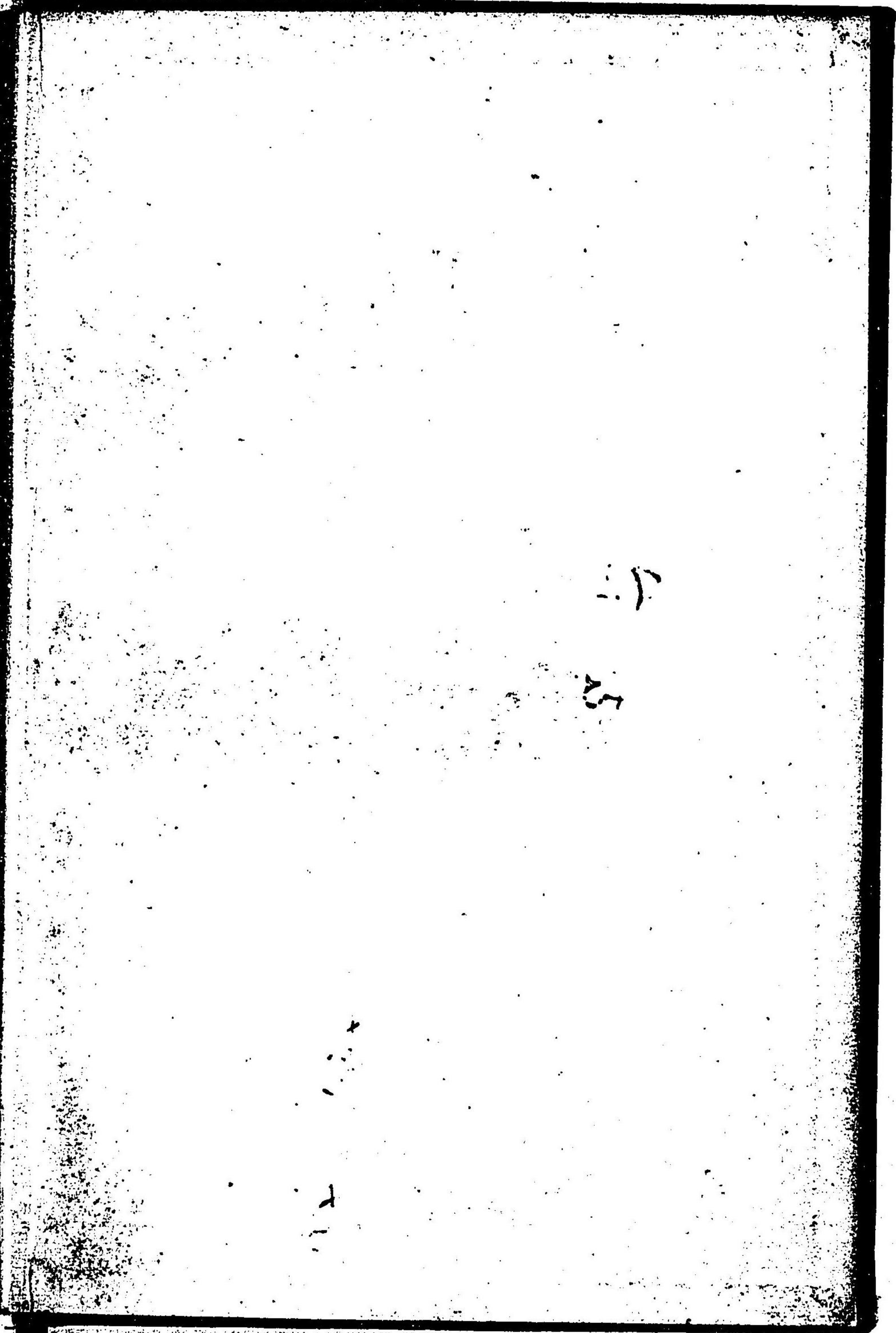
采風

白岩 艷子 / 編

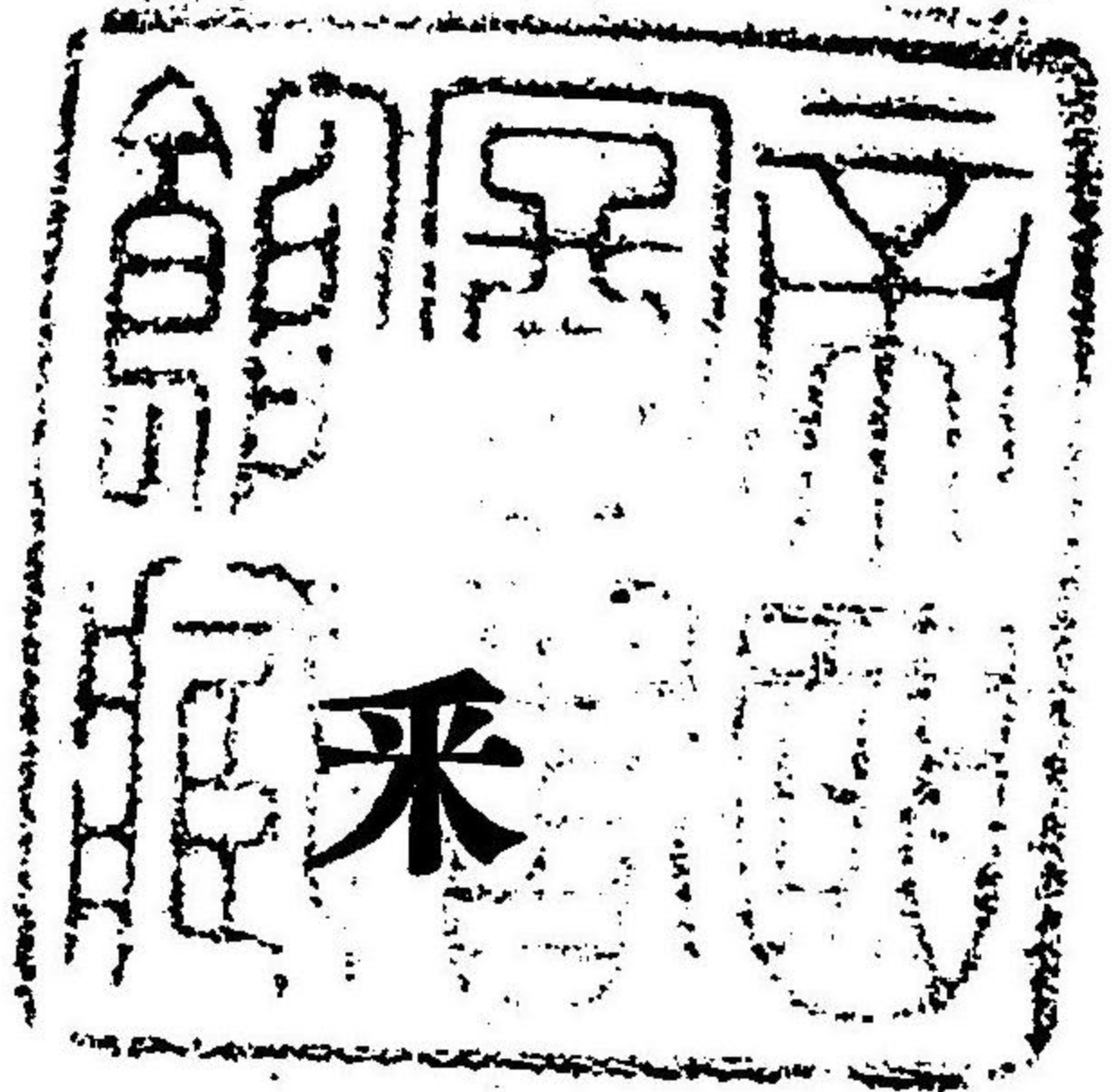
M43

DBC-0182





72-435



風

白岩艷子

寄贈本

白岩艷子

治  
43. 4. 18  
寄贈

采風序

長江の壯觀、峽口の奇勝、金陵星沙の眺め  
をはじめ、洞庭のゆほびかなる、西湖のうる  
はしきなど、余かつて一度遊びて、忘るゝこ  
と能はざるところなり。

白岩つや子ぬしは、備前閑谷黌の校長故  
薇山西先生の女にして、幼より家學を承け、

長じて子雲白岩君に嫁ぎ、よく家を修め、わが竹柏園の門たちならして、歌文の道をいそしまれぬ。

白岩君は、はやくより南清にものして、事業をおこされし人なれば、わが國にあるよりは、彼の地にあること多かりき。ぬしまた、夫君に隨ひて、往復十數度に及び、ふかく南清の風物に親しみて、その歌に文に、或は風

俗を寫し、或は旅情を敘べ、或は山水を詠ぜ  
るなど、いづれもかりそめの旅人の筆すさ  
びに異なり。殊に婦人の作として、觀察の緻  
密なるものあるぞめでたき。されば、一卷に  
せられよと、すゝめしことあはくなりし  
を、こたびいよゝ思ひ立ちて、世に公けにせ  
らるることとはなりぬ。ぬしの作、その數多  
く、固よりこの一卷に盡くべくもあらねば、

そは、第二集に於いて補ひてむ。

四

明治四十三年一月

佐々木信綱識



寺に鐘二葉に於て大鐘がなり

加藤武生著 徳島大学出版部

采風



白岩 艶子

河くまに舟さしよせて夕けたく煙に暮る

る岸の竹村(蘇州より鎮江にものしける時九首)



二  
鐘の音ゆふべの水をわたり来て蘆間の小  
舟むしろ帆おろす

船窓にあさ日にほひて森の大木梢なかば  
は薄紅葉せり

小舟朽ちてひしの花咲く枝河にあひる遊  
べり日は斜なり

よつ手あみまもる翁のひげ白しむなしき  
魚籃の満たむ世やいつ

岸づたひ小舟の綱手ひく舟子に少女まじ  
れり父や病みたる

沼に遊ぶ水牛のむれ野羊のむれのどかに  
暮るる蘆の村里

小雨ふる秋の夕べを河波に胡弓あはする  
舟の若人

四

ほしいままに秋風ぞ吹く水牛の遊べるほ  
かは障りなき野邊

やすらへば法の師いでてわが爲に菊の茶  
を煮る甘露寺の朝甘露寺四首

手折りつる桂花かぐらの一枝ひとえ轎子にさして露わ  
けのぼる山寺の道

焦山のいただき淡くもやに明けて江にそ  
へる村に庭鳥の鳴く

驢にのりてはせ行く友のうしろかげ蘆の  
穂末に見えがくれする

五

ただならぬ蘆のそよぎよさしよせて落人  
まてる舟もあらぬ世に(鳥江)

六

いにしへの跡とふ秋の夕雨やこころに誦  
する古きからうた(海陽江)

十二峰雲にかくれて江にそへるふもと廣  
野に秋の雨ふる(麻山)

五

轎子にのりて今日はわが行く舟路より昨  
日は見てし岸の蘆原

うちむれてゐのこ遊べる岡のうへに名も  
知らぬ花の黄なるが匂ふ

星うつり世はかはれどもとこしへに流れ  
はてなき長江の水

七

岸にそへる蘆間の小村くれそめて大江の  
水に夕ばえうつる

八

蘆そよぐ大別山の秋風にさざなみ寄する

月の湖(漢口六首)

たけにあまる蘆間のこみち黄菊さきて秋  
の日寒き大別の山

赤き青き旗さしもののかげ見えて銅羅の  
音おこる村はづれ哉

轎子にのりて行くや伯牙の琴臺に楊みだ  
れ散る堤こみちを

露しげき一すぢ堤わが轎子と君が馬と行  
く秋草の道

九

畫に似たる大江のほとりまぐさ刈る賤が  
敏鎌に夕日きらめく

のろしあげて旗ふるさまやさながらに物  
がたりめく兵船かな(洞庭湖四首)

夢の如き江上の月つきの中に今わが船は  
入るかと思ふ

人の世のちひさきおもひ耻ぢらひぬ空と  
水との湖うみの上にして

かへるさのわれらが幸も白魚磯の昔がた  
りに習へと思ふ

風鐸のひびきは遠く空になりてあけの階せき  
いまおりつくす(岳陽樓)

ある夜見し夢の薄雲たちまよひ月にもく  
らきうき洲の里(蘆林澤)

あめぐくと秋雨そそぐ四つ手あみ守る人  
なき蘆のまろやに(湘陰)

おはしまさばまつ告ぐべきを此たびの嬉  
しきにつけて父ぞ戀しき(長沙につきける日)

君と共に二度三度いくそ度見むとちかは  
む月を大江に(湘江)

君とふむ紅葉をたみちいつか又かくて遊  
ばむ岳麓の山(長沙九首)

おくれつる友まちあはす山かげのいづみ  
にちばしひたす秋草(白鶴泉)

籠にまじる野菊あはれと指させばかへり  
見て笑む草刈をとめ

おりてこし岳麓の峯雲にいりて夕もや深  
き江を漕ぎ歸る

跡とへば露にみだるる葛の葉のうらみが  
ましき虫の聲かな(曾公廟二首)

落葉ふむ旅人のせて廻廊のかげさかしま  
に池にうつれる

この樓に書ひもとかむ夏もがなばせを葉  
に降る雨を聞きつつ(席公祠)

道を聽きて心をすます人もあらず落葉を  
ぐるる禪窓のもと(開福寺)

先の轎子あとの驢の人呼びかはし狭霧を  
分くる宵やみの道

藍關のむかしがたりも忍ばれて驢背の人

の面わさびしき(萍郷に行けるとき王生が三十里ばかり送り來ければ二首)

驢にのりて夕日かたぶく秋の野を別れて  
かへる唐人あはれ

轎子にのれば轎子さしのそぎおり立てば  
袖にまつはるうなる子の群(湘潭)

五百年王者あとたえていたづらに雲ゆき  
きする紫金山の峰(南京八首)

夏草をふみわけて訪ふみささぎの道守り  
をり石馬石人



みささぎに初音手向けてほととぎす姿は  
霧の後湖のあなたに

うなるらがのぼりて遊ぶ城壁のくづれに

咲ける虎の尾の花

たそがれを家路にいそぐ驢のむれの足音  
さびしも石だたみ道

老道士いにしへかたる聲さむし北極閣の  
雨の夕べを

いにしへの榮華の夢のあとのせて畫舫  
ちたり秦淮の水

胡弓する音もさえゆく江の月に國を憂ふ  
る人ありやなしや

花はちすかをる西湖の朝あけや御遊の舟  
のいまでもあれよと(西湖九首)

驢にのりておぼろ月夜をうたせばや楊か  
すめる白堤の上

家鴨追ふ翁棹さすたらひ舟ひし咲く湖の  
岸をつたひて

ありし世を汝(いまし)に問はむ放たれし鶴舞ひく  
だれ梅の林に(放鶴亭)

駒の足音遠くなりゆく断橋のわかれかな  
しき夕暮の雨

露に伏すかるかや小道たどり行けばぬれ  
て聴ゆる靈隠の鐘

一すちの清き流を中にして道ますぐにも  
つづく竹村

いにしへは鳳輦こゝにやすらひて愛でま  
しぬとふたぎつ瀬の音(壱世亭)

秋ふかみ桑のひろ葉のいろづきて初霜す  
らし靈隠のみち

銅羅の音爆竹の音河上に三つ四つつづく  
丹ぬり引舟(蘇州六首)

遠き野に日はかたぶきて運河(運河)のかは波ゆ  
るう櫓の音ひびく

かほよ人みづから汲みし眞清水のかれし  
岩間に萩が花ちる(西施の汲めりといふ騰脂井にて)

二四  
ひしとる子歸りはてたるたそがれや小舟  
に蘆に秋雨そそぐ(采菱洲)

家三五桑わか葉せる畑中にむしろ帆かか  
る里の舟つき

かくて三人舟遊びすとふるさとの母に文  
かく燈火のもと(三人の弟と蘇州に遊びける時)

この秋は露ことにおけこの秋は月ことに  
照らせうた人來ます(師の君の來ましける秋三首)

折しもあれ唐あや紅葉あやにしき君がみ  
うたの花にならなむ

雨もよし秋くれがたの長江の岸のけしき  
を見つつ行きませ

民船に湘雨をわびし去年までの憂かりし  
旅路いまは夢にして（湘江丸開航しける時二首）

君を思ふわが此おもひ風となりて追風は  
吹かむ洞庭の湖に

吳淞ウソンに水先小舟まつほどを志づかにかか  
る有明の月（上海雜詠三十五首）

みなぎれば禹跡九州うるほしてあまりあ  
るらし楊子江の水

吳淞のあけぼの見むと駒なべて思ふとち  
ゆく朝霧の原

龍華ロンカの花の便ありいたづきのとくいえま  
さな共にたつねむ（千賀子ぬしの許に）

龍華寺のかへさは桃の花車みやびの友に  
春を告げばや(龍華寺六首)

けはひ濃きをみな子遊ぶ透垣のほとり真  
白く梨の花ちる

幼子に案内せさせて木蓮の一枝こひぬ畑  
中の家

さきだちし驢馬の鈴が音遠くなりて桃さ  
く里の日はたそがれぬ

官人の行列美々し春なかば紅ふかき桃の  
林を

こまとめてゑばしやすらふ薄月夜すもも  
花ちる畑の中みち

昭君のなげきに似たり鄙びたる茶館の窓  
の海棠の花

わがせこがかへります日と花がめの花い  
けかへて朝清めする

夕立の露まだ落つる楊柳の一むらかげに  
馬いこはする

民船の燈籠ながし見がてらに人行くらし  
も河沿の道

ふるさとの産土まつり今日なれば干さと  
のをちに伏しをがむかな

ふるさとはほたる飛ぶ頃ふるさとは梅黄  
ばむ頃こと國にして

もの思ひおもひつかれてねし夜半の夢路  
につづく故郷の道

三三

人ごとにかつらの花のかざしきて行くや  
愚園の月のまとるに

星一つひくくかがやきて夕もやに月かけ  
あはし張園の森

星暗きもりの下道わけゆけばかつらの花  
か袖にかをるは

のりすてし民船ゆるるあげ潮や早瀬にか  
はる運河の水

うれひありや金釵ゆらめくあて姿丹ぬり  
の轎子に桂花かざして

三三



運河に朽ちし小舟を家として泥ひぢにうもる  
るかれも人の世

三四

やきすてし紙し錢ぜのけぶりほそぼそと蟲な  
きよわるおくつきのもと

わた畑はたけここにかしこに日まはりの花咲く  
あたり小羊ねむる

賣う籬し兒りのふえの音さむき夕ぐれや秋雨そ  
そぐ西門の外

緋桃ひとうさく小窓こまどのものとの榻たたによりて履ぬふ  
をとめ髪うつくしき

菊咲きてあるじが古稀こきのうたげすと綵門さいもん  
つくる小春日の庭

三五

みそさざへささやかに飛ぶうら畑の桑の  
朽葉における初霜

ゆふされば鵲とまる野の末の楠の大樹に  
木枯すさぶ

天地にはちぬ心の一つあればよしあらた  
への袖せばくとも

紅の牡丹くづれて濃みどりのはえなき國  
と女申しけり(西太后の崩御せられける時)

いとけなき君あるしめす老いし國くにの  
かための人また逝きぬ(張中堂の薨去を聞きて)

都へと召す人もなき世の秋をむかしなが  
らに荔枝みのれる(楊貴妃の昔がたりをおもひて)

ねがはくはみそらの星の國までもわが大  
君の老ろしめさなむ(明治三十七八年戦役の頃)

三八

## 東林禪寺

序幕 白髯長きは父、若き黒衣の人は此館の主人、公  
けの任務を帯びて、暫し旅立つよし談る。父諾して奥  
に入る。やがて容顔花の如き夫人、兒をつれて入り來  
る。主人机上の筈を取りて兒をうつ。夫人は悲しげ  
に、あゝ又義弟が此兒の上を惡わるさまに、夫君に告げしよ  
と、泣く子を袖もておほひ、おゝよき子おやま過は再せじ、父上  
許し給へ、おゝよき子と、慈母の情。兒は甘えてひた泣  
きに泣く。我家に在らぬ程、教へおろそかに爲すなと夫

三九

人を誠む。母子奥に入る。叔父繼母の弟は白痴の甥主人の生繼母めると同じく入り来る。主人迎へて、叔父上か、能くこそ。否、能くも来らずと、いつもの金の無心いふ。白痴おろかしきさまして、と見かう見しつゝあり。

## 二幕

## 繼母の室の場

繼母は無頼の弟と相向ひて談る。白痴なる童は、母の肩により、叔父の膝にまつはる。白痴ながら、兄に代りて此家の主人たらしむと聞きて喜ぶ。叔父、甥をとまひて室を出づ。入りかはりて、旅より歸りし主人、繼母を拜して、まづ捧ぐる家づと。繼母は鬼の目を細くして、急ぎ立ち迎へ、衣の塵を拂ひ

遣りなどす。勞れをねぎらふ言葉もやさしく、下にも置かぬいつくしみ、曇りなき心には、繼しき母の偽りのなさけも、身に染みて有難く、謀らるゝとは夢にも知らず。母はさもいひ出でがたきさまして、漸う口を開き、あはれ孝行なる御身に引かへて、うたてや留守を預る妻の身にあるまじき行ひ、さは云ふものゝ、嫁が身のをさまらぬも、この母が至らぬ故、いかで許してよ、と空涙して貞女を陥る。母上、そは真か、と正直一途の主人、赫と怒りて、憎き女と走り出づるを、ますましたりとほくそゑむ傍に、例の白痴ハ、ハ、と高笑ひ、あわて、口を

おさふ。

四二

三幕

夫人の室の場

椅子よき程に、又机には蘭の

鉢あり。入り来る夫を喜び迎へて、恙なき御顔を見参らする嬉しさよと、愛ひの眉開きて、あてやかに花の面愈美し。主人は怒りの聲荒らかに、さがれとにらむ。

夫人驚きて、こは何のお怒り、何事の御心になはでかといはせもあへず、隠し持てる刃ふりかざし、不貞の女と打ちおろす。夫人聲をまぼりて、こは我夫、ものに狂はせ給ひしか。汝こそ狂ひたれ、と猶たける夫のかひなにすがりて、漸う刃を取り隠し、涙はらくくと、わが夫、

誰のかけ言きこしめして、かゝる濡衣をと、かき口説けど、先入主となりし主人の心、和らぐ可くもあらず、つと足蹴にして、胸に問へ、今よりは妻とも云はじ、夫とも思ふな、縁は断ちつるぞとばかり、袂を拂ひて出で去る。

あとに夫人はよゝと泣き入る。あゝ悪者ども、夫の心さへ取り果てしか、頼むは父上、それも我が濡衣ほさぬ間は、母のいつはり真と通りて、我が真心の諫も甲斐なからむ、あゝ何とせむ、何とせむ、われは夫に去られぬ、行くに處なき女の身、廣き世にうき身一つを置く方なしと歎きにまづむ。やがて心を取り直し、はふり落つる

四三

涙を硯にすり流して、今はと捨つる世に形見の玉章、父に宛てたる一通泣く／＼認めて、無心に遊べる吾子を呼び、こた吾子よ、祖父上にお使してたもれ、これは大切なるお庫の鍵、母のこの手紙と、落さぬやうに。ハイとおとなしく走り出づるを、暫しと呼びとめ、つく／＼と見まもる幼な顔。あゝ、今宵よりは母無き子と、思はず落とす涙。母様なにを泣き給ふと寄り添ひて、いふかしがるには、ッと心付き、否々とまぎらはす。廻廊傳ひに行く子の姿、延び上り延び上り見送る。

## 四幕

宵暗にまぎれ出でて、常は乗物にて往來する

道を、徒歩にて急ぐ生家の門、おとなふ聲もつゝ、まじ。供もなくて何事の御いらせぞ姉上、と迎ふる弟の顔、涙のひまより見あげて、ありし次第を語り、されば姉が一生の願、かの高德の尼君いさす山寺に伴なひてよ。早まり給ふな、と諫むる弟の言葉も今は恨めしく、さらば姉が言聞て給はらぬか、迷ひ出し身なり、一人にて分け入らむと、立ち上るを、さほどに御心決し給ひしならばせんすべなし、御供申さむとは、らから打連れ立ち出づ。

五幕 後妻の詞ながら、真とはおぼえず、彼の貞淑の嫁女がよもやと思案にくれたる父、繼母猶讒訴の言葉

をたゞず。折から白痴の童走り來りて、姉の家出を告ぐ。主人を呼びて實否を糺さむと、人を呼ぶ折しも、入り來るは可愛き孫なり。父のほとりによせじと、白痴は、にらまへをり。幼子は、恐づく、祖父に近づきつ、賢くも母にいひつけられたる如く、鍵と手紙とを渡す。薄墨のあともわはれや、亡き子より父上に、これはと驚き封おし切り、讀みくだすまゝに、色かはり手はをのく。繼母は折悪るしと眉をひそめて、白痴の子を招きて室を出で去る。こなたは祖父、老の涙にかきくれつ、孫の手を取りて泣く。父の召しに、とつかは入り來

し主人を見るより、嫁女の手紙を差しつけて苦しき聲わが子ながらこのウツクシ子、あたらし貞女を。父上、貞女とは誰のことを、いまだ御聞には達せざりし、不貞の妻が家出、と言葉をかへしつゝ、思はず文に目を遣る。こは、さてはと驚く子、父は聲をはげまして、早く早く跡を追へとせきたてつゝ、おのれも孫の手を取りて續く。主人は足早ければ、早くも山の麓、一すぢ道にはたと逢ふ妻の弟。おゝ、義弟か。姉上は。おゝ、兄上と、力なき聲なり。主人形見の文と思ひ合せて、心も消ゆる様に夢心地にて足を空に、山の方へ。

六幕 正面に観音の御像、香の煙たち舞ひて、尊き本堂の場 お蠟上ぐる尼一人二人、外は木枯の音、墨染の衣わびしき山寺に、あだかも花一輪、枝をはなれし寒椿の趣あり。尼は楽しきものにはあらず、女の道に違ふとも世は捨てぬもの、姑の悪たくみ、叔父の謀計、などあばき給はぬと、あたらし散らさむ花の姿を惜しみて、老尼ねもごろに諫むれど、耳にも入らず。憂き身を救はせ給へとて聞かねば、力及ばず、今はと飾をおろす。女は命の黒髪、さりとは憂きに捨てつるわが世の形見と、丈なすを手にわつとなき倒れ、氣を失ふ。鐘の音、讀經

の聲、線香の煙、濛々とたち舞ふ。あてやかなりし刺繡の袖、墨染に變りて、うら若き尼、われとわが身をかへりみて心弱く、かくては夫にも子にも逢へぬにやと、立關（入定の筈に泣くく）入れば、老尼、鏡をはたと閉ざす。折しも狂氣の如く入り來る主人、弟子の尼さへ兼て、老尼を呼ぶ。老尼珠數つまぐりつゝ出でて、いづ方よりと問へば、我が妻、我が妻に逢はさせ給へと、奥をさして入らむとす。妻の君とよ、おゝ妻の君、遅かりき、今しもかざりおろして、佛の道に、さればこゝには、御身の妻といふ人あらず。主人失心して倒る。尼達あつまり、



呼び生けて、懇に山を下れと勸む。唯一目、一目あひたしと男泣に泣く。老尼あはれがりて、道ならねども、さらば一度許し申すべしと、立關のほとりに伴なふ。小窓より變れる姿を一目。こは我が妻か、花の姿の我が妻かと、涙の聲はまさしく夫と、さすがに道心ゆらめきて、胸かき亂さるゝ愛のきづな、我れにもあらず小窓よりさしのぞく。やつれし面影、墨染の衣に恨みは盡さぬ歎き。痛はしや我が妻、罪は皆この身許してとさしよりて手を取らむとす。老尼おどそかに推し隔て、今は佛の御弟子、破戒あるべからず。男聞かず、かけよ

らむとするを、數多の尼力を合せて戸の外に推し出だす。

老の身は足もと危ふく、おくれて着きし祖父と孫、嫁女に逢はして、母様にと音なふ聲、尼達目を見合せて當惑す。吾子か。母様と、立關の小窓にさしのぞきかけよる恩愛の涙、おゝ嫁女、なさけない其姿と、わつとはかり聲をはなちて泣く。此孫が迎へに來た、歸つてくれと手を合する老人。子は、母様歸らう、母様歸らうよう。父上にも相濟みませぬ、さり乍らいとし子に別れて、かかる姿となりはてしも家の爲、今は出家の身にしあれ

ば、ゆかりもなし、悪者どものたくらみ残らず申さむと、こゝにて繼母の企を談る。父初めて聞きし家の大事に驚ろく。さらば父上、吾子を、吾子を頼み参らす、吾子よ、祖父上と共に歸りて、未々迄すこやかに榮えよや、母は、と跡は涙。いやだよう、母様一所に歸らう、家に歸つて一人で居れば、伯父様に又うたれる、いやだ、いやだとむづかりて、地だんだ踏む。尼達たまらず、一同よゝと泣く。さらばどうしても歸つては呉れぬか、老の身を生き長らへて何かせんと、あはや立關の柱の石に額うちあて、死なんとするを、尼達いだしとゝむ。主人氣

ぬけして眞の馬鹿になり、いづこよりか又迷ひ來て、小窓をのぞく。尼達驚ろき騒ぐ。

七幕 萬目白皚々、いつしか更けて雪となり、山寺を遠く見せたる場 悪者の叔父、白痴の甥をそゝのかして大鉈ひッさげ、物かげより待つとも知らぬ老人、孫の手を引きて、きゝわけなく母様々々ようと泣くをすかしつゝ、とほくと山寺より歸り來る。折から異形の者數多従がへて、神しづくと林間におりたつ。老人と幼子とは、悪者の叔父に追はれて、逃げまどふ。悪者は大鉈ふりかざして、あはや二人を眞二つと見る刹那、

鬼神槍にて悪者のかひなをはたと打つ。主人も亦追はれて来る。と、引き組み倒れたる處に、神の使の猛獸いでて、悪者を食ひ殺す。繼母髪は亂れ口はさけて、さながら鬼女の相、走り來りて白痴の子と力を合せ、祖父と孫をねらふ。二人にげまどひて相抱きたるまゝ、心身つかれて、はたと倒るゝを見すまじ、飛びかゝりて打たんとする間一髪。世はとこやみとなりて、雷鳴轟き電光一闪、悲鳴と共に悪人ほろびて幕。

### 紅桃

春は龍華寺の桃見、老いたるも若きも、此時をはづしては、日本人の面伏せと、浮き立ちつ。茶店、煮賣屋さへ畑中に出で來て、里の賑はひ、云はん方なし。舟より行く團體の幾組、陸には家族づれの馬車、引きも切らず。椅子を持たせ、毛布を載せて、あるは丘の上、あるは花の木蔭に、樂しき席ぞ設けらるゝ。瓢ひんならぬ瓶びんづめの酒に、用意のわりで、珍らしがりてより來る支那人にも、おすしの一折は取らすべし。男子たちは、酔ひてうたひ、女

たちは今日を晴れの衣の裳裾かへして、花蔭に鬼ごと  
 などす。歸るさの一枝楊を添へたるはやさしく、木蓮  
 は夕暮の色にもさやかなり。云ひ合せたるやうに、誰  
 の肩にも桃花にほひて、花見車の音、大馬路につづく。  
 船なるは、夕霞花も緑も一つにこむる百歩橋のあたり、  
 今し岸を離れてかへりみすらむか。わゝ一年に樂し  
 きはこの春の一日ぞ。

## 夏の日

人々のよそほひ眞白にかはりて、電氣扇に漸ういきを  
 つく。外の暑さ入れじと、室のよるひ戸かたくたつる  
 やうになりては、そぞろに日の本の戀しさ。避暑に歸  
 る人、昨日も今日も船に満ちて、ねたや二日の後には、山  
 紫水明のふるさと、海邊もよし、山里もよし、藍染めの浴  
 衣すはだに着て、月に立つ影、思ひやるだに涼し。浴衣  
 に足袋はいたるを、こゝにてはのがれぬ風俗と聞くも  
 わびしや。晝の暑さ、夜までさめず、霧を厭へば戸も開

けられず、夏こそ苦しけれ。

## 天長節

日本晴のうららかなさ、十時になれば、人々フロックコートに絹帽、心も身もすがくしく、領事館に集ひて、うやうやしき遙拜の式、君が代の聲ものどかなり。シャンペンの祝杯に、いつしか櫻色になれる、今日を榮はえある菊の花と、いづれ劣らぬめでたさ。こゝかしこの日の御

旗、朝風にひるがへるを、道すがら見るに、あゝ日本人の多きことゝ喜ばし。園遊會のにぎはひ、夜會の美しさ、白襟紋付の夫人たちの晴姿、外國に住みては、此日の殊にありがたくて。

## 冬の夜

めづらしう雪空となりにしかな、明日は銀の世界となりて、常は黄金にはたらく人も、暫し風雅の詠めやすべ

き、あれよ、すさまじき風の音と、今しもともしたる瓦斯の燈火のまた、くをあぶぎつ。炭さし添ふるストウプのもと、心やすき一人二人の友來合せて、物語は盡きせぬ都のこと故郷のこと。今度の便船には、いつよりも文の多かりし、中にも嬉しきは、誰々、御よすが定まりて、いづこに何日は御披露の宴あるよし。そよ、某の君も新夫人と共に次の船にて來ますべし。嬉しきこと、をかしきこと、談るに更けて時たちぬ。もう歸りましよう、と立ちかゝる人を暫し留めて、ボーイお供の用意は宜しきや、眠りてか、起し置けよと。さて友を送りて

出づる門のほとり、早けはひばかり白う見ゆるに、明日は郊外の寫真とりにとほ、笑まる、女の君雪の朝あけは美しきもの、吳淞へ遠乗りの樂しみ、さらばといふ間もあらせず、靜なる大路に輾轉たるわだちの音。

## 羽子

天を轟かす除夜の爆竹の音しづまりて、元旦のしづけさ。初日ををるがむといふ人もあらず、見渡すかぎり

街の家つづき、一軒も残らず戸ざしはて、赤き紙に墨の香もこゝろことに、紫氣東來、國恩家慶など、めでたき限りの詞を書きつけて戸に張りたり。さすがに日高うなりては、年ほぎの人往來こゝかしこに、車よ轎子よと美しうよそほひ乗りて出で入る。内には鳴物入りの酒宴さゝめさあへる、賑はし。幼子達は門に出でて羽子つき遊ぶ。大方は男兒なり。えび茶、あるは紫の上着に、水色の下着して、黒き帽子の頂きについたる赤き打紐の結びも新しう、繻子の履はいたる、あどけなく愛らしきが、落ちくる羽子めがけて足を上ぐる、巧みな

るは、二十三十はづさず。ひらくと舞ひ上り、舞ひ落つるを右に左に受けてつく。氣上りてさと紅したる頬のあたり、眉のかゝりも、女のやうなる美少年この國にはいと多し。恰も蹴鞠する形ち、様かはりてをかし。腰ゆひたるひわ色の帯のふさ、折々なびき見ゆるも美しう、のどかなる初春のながめや。

## 中秋

過ぎし野分に鳴く蟲の音もすみて、ものゝあはれはま  
さる中秋の月、詩人ならぬ人も李白が風雅を談りて、江  
上に舟を浮べ、終夜めで明かす。市中には、赤き青き絹  
布の薬玉、月餅の招牌をかざりて賑はし。雲なか、り  
そと、誰も誰もさやかなる光を待つ。

### 書齋

雲形磨き出せる大理石の卓子に紫檀の椅子、窓のもと

に置かれたる蘭の花かをれる室の清らかさ。折にあ  
ひたる聯の句どもいとをかしう、机上には何の書にか、  
帙に入りたるが、繪巻物と共に並びたり。あるじ待ち  
顔に銀の水烟袋スエカイ一つ、五色のふさの風にゆらめいたる。

### 森かけ

今の江氏は建霞氏の息なり。日の本に留學五年、初め  
の二年は、閑谷なる我が亡き父の許に在しき。さて大



阪にて工業を修められつ。幼き時より相知れば、今も弟のやうに隔てなし。人柄もなみくのから人のやうならで、正しき家の子なれば、さすがにおほどかなり。今度工場開かれぬるよし聞しかば、見に行く。未だ程なくて萬と、のはぬ勝ちなれど、若きあるじの、常は上着ぬき捨て、職工と共に働き居ますよし、ひたすら業をいそしみて、過ぎし頃開かれし氏が故郷なる蘇州の博覽會にも、自製紅白の蠟を出品し、銀牌得ましぬとぞ。龍華寺への道、半より左に曲りて、徐家漚の天文臺に今すこしといふ處、河添の森の木蔭に、利用公司の招牌を

見るべし。ゆるぎなう基さだまる迄にはなほ數多の苦しみあらむ、若き人のよくたゆまで、成功し給ふやいかに。此人も早く父君に別れて、世の困難にあひ居ますいたはしさよ。我が弟達も今はた同じ運命、學窓のもとに書を友なる二十ばかりの齡を、早くも世の荒浪に便りなき小舟と漕ぎ出でいそしめるよ、あゝ父無き人ばかりあはれなるはあらじ。河に沿へる森の木蔭しづかなるを庭に見て、門の方は廣々と畑つゞき野つゞきなり。樓上の技師室に案内せらるゝまゝに、またがひ行けば、森にむかへる窓開きて、閑谷のやうならず

や、この静けさと、打笑まる。かの塾舎の窓、實にかゝる静けさをかき、父なき後として、父の如慕はれし師のなきを、今も忘れず、朝夕の眺めを、學びつる閑谷にたぐへいませすか、實にかくて談らへば、父の許に在る心地ぞする。初めて閑谷に行きし時、星かけ暗き山路、たぎつ瀬の音を何ならむと、いぶかしみつゝ、山莊に師と初めての對面あり、昔談りとなりぬるかなと談らるゝを聞けば、故郷人に逢ふなつかしさにかはらず。嬉しかりし今日の一日、こゝかに弟へいひやらばや、あはれ同じくは此人の父君にも、我が父君にもきこえあげをほしきを。

### 茶館

お茶飲むとて、朝より夕べまで人入り集ふ、薄暗き家のうち、煤けたる卓子かこみて、缺けたる茶碗そゝぎもあへずすゝむる。夏は肌ぬぎたる男子の給仕したる、かかる處は客も大かた苦力なり。欄干めぐらしたる高樓に、彫刻したる廂きらくしき招牌かけて、夜はあかわかど燈籠の火ともしつらねたるもあり。かゝる處

にては、杏の種子、落花生の砂糖漬など添へて出す。臺つきたる茶碗に、茶の葉入れて、客の前にて湯をさしてすゝむ。大方は急きよ子用ぬ習慣なり。茶碗の蓋かたむけつゝ、飲むを面白がりて、初めての人は誰も試みるめり。

愚園といふに、藤の花の盛の頃行きしことあり。池の汀に咲きたる薄紫の美しきを見つゝ、端近き石の卓を圍み、例の杏の種子などにて茶をすゝりつゝ、庭の太湖石の態とらしむを眺め居れば、熱き湯に香水したゝらして絞てぬぐりたる手巾、幾度も幾度も持て來。池をめぐれ

る廻廊のかなたこなた、阿片飲む室もあり、演戲する舞臺もあり。刺繡の小履に頬染めたる歌妓うたひめの客と共に遊べる、裏庭の玉ころがしには若き人ぞつどひたる。

## 日向葵

綿の花咲ける畑つゞき、秋風渡る野末など、處々に日向葵の花咲きたり。名のやうには榮はえなき色香を、詠めむ爲ならば、猶外によきがあるべし、いかにと此國の人に

問へば、西瓜の種子は價たふとくて、賤が夕けの膳には  
 のぼらず、この花、見む爲にはあらで、種子を取るなりと  
 答へぬ。道の邊に捨てし柩のめぐりに咲きたる、亡き  
 人の罪のゆるしを天つ日に乞ふらむさまなり。破れ  
 たる葉ばさくと音して、うなだれたる花の愛ひ顔な  
 るよ。遠くより見れば、人など并び居たる様にて、秋風  
 にゆらくと大きな花のゆるゝ物さびしさ。花に  
 疎ましきは無けれど、この花のみはと云へば、心なき言  
 いひ給ふな、稻に美き花は見ぬをと、かたはらの人は談  
 りき。

### 橋上

往來絶えせぬ橋の上、用なき折々打眺むる、いとをかし。  
 馬車自動車にて、ふみとゝるかし渡るは、よききはの人  
 なるべし。辻車のがたくと、車夫の弱りたる、徒歩な  
 る人のゆるやかなるを、あとより自轉車にて追ひ越し  
 行く、したり顔なりや。忙しき世を窓の内より眺めて、  
 ゆくらくかゝれ行く橋子の人、小車にこぼるゝ様に  
 乗りて、車のきしりをかしく押され行く人、人様々を朝  
 より夕べ迄おどろくの響の外は、もだして渡す橋こ

そ興深けれ。夜はまして、そゝろ歩きの人も加はりて、賑はしきぞかし。更けてはさすがに人絶えて、月影靜に照らしたる程、馬の蹄の音高うゆく、大かたは印度巡查なり。黒き面に赤き布頭カサにうづ高う巻きて、虎髯ヒゲいかめしき大男の、手槍テサかいてみ馬上ゆたかにうたしたる、晝など見る心地ぞする。

いつなりけむ、蘇州スウに行きし時、夜泊ヤボクならで、朝とく舟の着きしかば、陸リクに上がらむには少し暗ければ、窓開きて見渡すに、近う石橋あり。この國クニぶりなれば、形いと珍らし。朝霜アサキ白う置きたるを、幼なき物賣モノウの、呼び聲コエあは

れに只一人渡り行きし。誰が家の兒と云ひけむ物がたりも思ひあはせられて、今も忘れがたし。名に聞えたる寶帶橋ホウタイハシよりも、この方こそ心に染みしか。

### 杏花樓と天仙茶園

夕つかた、良人と共に、四馬路シマロの杏花樓アノカキに、師の君を案内しまつる。参りあはせし同文書院の藤島君、支那人余聯珊レンサンといへる、ともなひたり。

暗く騒がしき家の中、隣れる室には、廣東人のうたげ酣なるに、入り来る客人ある折々、銅鑼うちならす音、耳もしひんばかり、かゝる所へわれもはじめてなれば、驚きて耳をおほふ。呼びにやりつる歌妓、こちたきよそほひして來たり。胡弓にあはせて、一曲うたひ終れば、禮申して歸る。今度は未だ幼き十五ばかりなるが來れり。前のにくらぶれば、清楚のつくりなり。生れを問へば、蘇州と答ふ。昔より美人に名高き處がら、げに花のやうなる姿、うたふ調も妙なり、千里の外の客人の心地もせず、此よし傳へてよ、と師の君のたまふ。いかで

かは、みめも調べも劣りがちにて、と恥らひたるさま、めでたし。曲終へて歸る。やがて又入り來たるは、都のうまれ、ながれくしてこゝにはあれど、曲は北京の調なり。歌の心は知るによしなけれど、三人のうちの上手なるべし。にこやかに笑みかたまけて談らふさま、物なれたり。時もうつりぬ、いざ芝居に御供し侍らむと出でたつ。向ひの室に人の立ちこみたる、何ならむとさけば、新婚披露の宴といふ。そはめでたきかな、いづれか花婿の君ならむと見る。赤き衣着たるが、其れなめりといふに、見れば年まだ十五にも満ちたらぬが、出

入多き客人に手をさしあげて揖禮する様いとねもどろなり。まことの芝居なるよと師の君ほ、笑ませ給ふ。賑はしき四馬路を見つゝ、天仙茶園にいたる。道のほど、行きちがふ轎子の内、綾羅のよそほひ夜目にうるはしく、中にも幼きを肩車に乗せ行くは、さながら樵夫の花をかざしたるやうなり。高雅なる風こそあらね、世の中の春をあつめて花に酒に酔ふこの夢の間にこそ、城はかたぶき社稷は覆がへるなりけれ。名たゝる優の舞臺に出づる今宵とて、棧敷は透き間もなく人いり満ちたり。十中の八九は男子、日本の劇場

とはうらうへなり。聯珊ぬしの心盡しにて、いとよき所に我等の席は設けられぬ。例の耳おほはるゝ囃子まばし鳴りやまず。と見るまゝに、舞臺に現はれたるは、いかめしき官人、馬にのりたる心ばへなるべし、鞭をあげてさし招く。ほどなく従者と見ゆる三人いで來れり。折から、かたち見すぼらしきものごひの、よろめきく、其所を過ぐるを、官人いさまさきて、従者に命じ、すされよといふ。猶さかであるに、鞭をあげて打ちすゑざま、従者どもつゞけとばかり、かなたの幕に入る折こそあれ、花と見ゆる手弱女、足いとも小ささが、ゆらく

と立ちいで、伏したる乞巧を慰め、且つ物取らせん、内に  
 いれよなど云ひおきて入る。こたびはきたなき翁立  
 ち出でて、いかに乞巧など我家に入りたる、とくく行  
 けかし、と促がすに、否、この姑娘コウニヤシのいりてやすらへと  
 のたまひしまゝに。いかでさることあるべき、わが愛  
 娘の身の上を知らずやと、怒りに任せて持ちたる長き  
 煙管ふりかざし撲たんとす。待たせ給へ、若し我詞ま  
 ことならば何と加したまふ。まこと、や、よし、まこと  
 ならば、われ汝を拜せん。いとよし、いざ、と誇らしげな  
 り。汝は心狂へるならむ、我愛娘は、世を全盛のうたひ

女、大官の御方すら心を碎きて一笑を買はむと、百の寶  
 なげうち給ふものを、かゝる汚らはしき乞巧に、目をだ  
 にかくべきかは、いでく我愛娘こゝに招きて、乞巧が  
 驚くさまを見んと立ちあがるほど、先の手弱女、飯をも  
 りたる器、美しき手にさゝげて出で來りぬ。わが父何  
 をか、いさまき給ふものうしとて歸しつるかの貴人が、  
 怒りをうつす非道の鞭に伏しなやみたる、あまりにあ  
 はれなれば、入りて休らへとこそいひ侍りしか、もの欲  
 しげなり、いざ參らせんとさしいだし、いざ乞巧の顔つ  
 くく、とまもりて、うら恥かしげに思ひしづめるさま、



かの梨花一枝雨をおびたらむやうなり。父の翁は、この意外に驚きあきれて、娘の顔まじろきもせで守りをり。乞巧は、いかに主人の君なほ偽りとおぼすや、とく來りて我前に拜し給へ、と身を起す。父の翁は怒りの聲高く、おはや煙管も折れよとばかり打ちすゑんとする間もとし、手弱女は父のかひなにすがりて、我父さな怒り給ひそ、われ此人の相を見參らするに、かく路頭に迷ふべき人ならず、必ず高官にのぼり、世の中の榮華を身に集むる人となりまさむ、賤の女が一飯のなさけ、心よくうけ給ひしこそ嬉しけれ、禮なき業なし給ひそ。

と、乞巧の方をぬすみ見て顔赤らめ、父の手をくわりて内に入りぬ。

幕かはりて、先きの乞巧と父の翁と、二人卓を圍みをり。愛娘が言葉の奇しければ、種々のこと問ひ試るに、答は水の流るゝ如し。聞けば、秀才の學位もありとか。かなし子が願のまゝに、遂にいて婿とせん約は成りぬ。手弱女呼び近づけて、形ばかりの式、つゝれの袖にふさはしからぬ花婿にさしむかひ、これは又花はづかしき花嫁君、願はゞ玉の輿にも容易く乗り得べき身を我からと、我子の美しくしさ、おもひの種となりて、さめざめと

泣く老の涙、嬉しき悲しき幕は終へぬ。

花婿の乞丐、後に進士の試みに北京へと上りしよりは、旭の昇るが如く、高官の人となりしを、我妻の賤しき生れを疎みて、其昔恵まれし一飯の徳と共に忘れ果て、高嶺の花に心をうつして、おはれ糟糠の妻を刃に伏さしむるくだりありとか。人情の輕薄、美人の薄命、昔も今も將た唐もやまとも變らぬよと、師の君良人と共に、うちひそみ給ふ。かの手弱女に扮したるこそ、上海一と稱へらるゝ名優周鳳林なりけれ。

例の囃子騒がしう舞臺に出で來たるは、武裝いかめし

き大將なり。年を経し戰に、兵は疲れ糧は乏し、おはれこの城支ふる今日あすの謀、おもひ煩らひて、悲憤の涙にくれたる程なり。をりしも出で來し從者の一人、御前に伏して、いかに我君戰に疲れ、食ふに物なき兵は、かなしき妻子を血涙の刃に刺しぬ、今は此城中、大奥の御方ましますのみ、残りの兵ども、唯餓を待つより外は侍らず、今日よりは御前に供する一品もなし、何處の城も皆落ちぬ、降らんは千歳のうらみ、おはれ我君、今一戰其れまでをいかにせむ、此城中女といへば大奥の御方ましますのみといふ。大將は思に沈みつゝ、内に入りぬ。

涙にやつれし面影も一筋亂れぬ黒髪たゞしく、君が幸なき武運、兵士等が苦思ひ餘りて身を清め香を焚き、夜深く庭におり立ちて、天神地祇に祈りを凝らしおはす。これぞ大奥の御方と知られぬ。と見る、先きの大將窺ひよりて、うしろより及もてさゝむとす。最愛の妻、まして我を思ひ我が兵をあはれびて、斯くも祈れる殊勝のさま、よしや鬼となるともうたるべきや。心は消え、腕はなえ、及も地に落ちんとす。かくては果てじと幾度か勇を出したれど、いかゞはせむ、既に氣は挫けたり、胸をさすり息を潜めて、物かげに立ち隠れぬ。祈り

を終へて徐々と歸る美しき妻の姿見送りて、又思ひ入れ、るあたり、眞に逼りたり。きゝしにまさる支那劇よと、師の君のたまふ。更けたれば見さして歸る。彼の騒がしき囃子なからましかばなど語らひつゝ、賑はひまさる四馬路、水に陸にともし火花やかなる河街を、夜風に吹かれつゝ、馬車を驅りぬ。

## 新公園

目もはるに緑を敷ける芝生、めぐりの垣根にいつも咲き匂ふ花の色々、近きは薫りを送り、遠きは虹の如し。門のほとり、あづまや、小高くつくりたり。相向ひて平なる處に、めぐれる柱に針金渡して、自ら薔薇の屋根葺きたるがあり。邊りを皆紅白の同じ花にしたる、めでたし。色白く腫青き稚兒の、裾短かなるが遊び居たる、つきづきし。池に添へる太湖石の洞中に、腰掛二つばかりすゑたる、こゝにはやすらふ人稀なり。池に渡せる橋の上の眺めこそ、いひ知らずをかしけれ。芙蓉ちりて秋はさびしき空の色、臙脂に夕ばえて、灌木の葉が

くれに、塔の形したる支那家のかなたに沈む夕陽、池の汀の一むら蒨穂に出でたると共に、水にうつれるゆでたさ。菖蒲さく初夏の頃、こゝに立ちて、雨雲のゆき、を眺めつゝ、杜鵑待ちし景色を、をかしと人に語りしかど、秋の半、この夕ばえには、まかざりけり。

### 長三 チヤンサン

いろまちの四馬路、不夜城の賑ひを、女の見たる通りす

がりの一目男の君に談らむか。大通りの大馬路を南に、二馬路三馬路を車にてつと過りて、さて四馬路の夜にいりませ。ぞめきの群道をふたぎて、百の燈火盡よりも明らかなり。三層四層の高樓の上、こゝにもかしこにもおこる糸の音のゆかしさ。甲高なるうた聲、外まで洩れて心ぞときめく。と見る、花を簪したる人、右に左に走せちがふ。誰が招宴に侍るやらむ、これや聞ゆる長三か。燃ゆるが如き紅の頬、珠釵金鈿綾羅のよそほひ、目もくらむばかり、腕輪重げの細さかひなを男の頭にかけて、ふはりと肩車に乗りたるやさしき姿、ど

よめく群集道をゆづりて見送る。

生れは蘇州と知れるのみ、九つの年養ひ親に賣られて、憂き河竹の流れ流れて春申江に、こゝはきこえし港とて、吳越の客は昔のこと、名も知らぬ外國の旅人が慰めにも聘せられ、胡弓にあはせてうたふ節あはれといふは稀にして、花ならば手折て見たきが人情とやらむ。戀せし人ありとのたまふか、よしありとて儘ならぬ身のうたてやなつかしき人には思はれず、思はぬ人に愛でらるゝが習ひ、かゝるはかなき身のたぐひやまども侍るにや、日の本はよき處とさく、供なはせ給へよや

と、先の面白きうたのぬしとも見えず、紅蠟の火影に物  
思へるさまあはれにらうたし。やがて笑まひ美しう、  
さらば客人の君、我家おとなはせ給へと、つと立ち上り  
ざ文、秋波おくりて、卓に置きし小鏡ふところになよな  
よと蓮歩をうつす階のもと、供の男が肩に載せられ

### 髪かたち

大方の女の、一すぢ亂さぬ髪のたしなみは、さすがにふ

るき教への國とゆかし。濃きけはひに頬紅燃ゆる様  
にさして、玉の簪黄金の釵子、こちたきかざりも美人の  
は見よし。近き頃は前髪山形に切り下げて、いたう根  
さがりに結ぶが流行るといふ。着物のかたちも、この  
年頃にいたく移り變れり。袖廣きを田舎めくとして、細  
う仕立て、かひなのいやが上にも細かれと願ふ。袴も  
同じ様にせまきを好めど、見にくし。襟袖口にレース  
を付けて、したり顔なるよ。そうじて衣の色淺くなり  
たり。紫紺などは古めかしとて、若き人は用ゐず。良  
家の子女たち、水烟袋手にしてもものへ行く、品劣りて、外

目にはうたひ女のたぐひかと思ゆれど、是がはやりと聞きぬ。少女のまみ口つき、近増りして美しきに、姿こそ今少しあらまほしけれ。かくいへど、この人達より見なば、亂れ勝ちなるひさし髪、幅廣き帯の結び、はたいたかに思はれむ。口さがなしや。

### 小車シヤオチヨウ

驟雨さとし、く廣野原、たちよる木蔭もなき一すぢ道

を、小車に乗りたる人のぬれじと傘かたむけて行くさま、いとをかし。工場に夕暮の汽笛鳴りて、道に續く工女の群、小さき足の運び遅きを、かごとくに、強ひて、のせものせたり、兩方の腰掛に四人づつ、淺黄の衣、遠見よく、さすがにかゝるきはにも生花の香りあるを簪し、車輪のさしりに女の八人、唐さへづり賑はしう過ぎ行く。花見て歸る酔のまぎれに、この車に乗りて、花一枝を帽子にはさみたる邦人、春は龍華寺の邊りに見るぞかし。この車よ、こよなき便りと昔よりもてはやされて、今も電車にけおされず、分け入る野路、軒をまじへし小路、凡

て人の足跡ある程の處には、大きな荷も安らかに、人をも數多運ぶ。押す車夫の破れたる衣、垢に染みたるを今すこし清うして、花かげにやすらひつゝ、召せや召せ御一つれ、などいひたらむには、をかしからましと、さる人の申しき。

### 船出

いつもなれど、をかしきは舟出のさまなり。かしまし

き苦力クラリイ思ひくの荷を肩にして、昇り降る梯一つを、我れ勝ちに、乗る人見送る人連なり渡る。甲板は人もて埋もれたり。久しき別と名殘惜しみかたらふ人、安かれと舟路を祈りいふ人、待つ人やいかにと、ざれ言ひひてひしめく誰彼れ。數多の人の一人一人あわたしき思を、あわたししう云ひ交す。出帆のかね打ち鳴らす程、こぼるゝやうに梯を下りて、棧橋にぞ并み立てる。忘れたること思ひ出でて、上と下に云ひ交はすは、態とらしけれど、後れて來し人の近うよりて禮するに、聲はきこえず、たゞ笑みかはしたるは、中々に思ひ深う忘れ



がたきものなり。水の底すくひ上ぐるやうなる汽笛と共に、今しゆるぎ出づれば、舟よりも橋よりも、帽子手巾打ちふりて、又一時はさゝめきぬ。やうやう遠ざかりゆきて、人聲全きこえず、排水の音のみ高うひびく。遙にかへり見すれば、木立涼しき公園、音楽堂のあたり、白き装ひの人五人六人、汀のベンチのほとりに遊べる子達がつば廣の帽子、アマが着たる淺黄の服、緑の中にさやかなるいとうつくし。園の後ろより、正金銀行の屋根ばかりぞ少し見ゆる。今工事中の公園橋落成の日は、往來の馬車このあたり迄、ひびき聞ゆべし。はな

れこし波止場に未だ立ちつくす人、小さく小さくなりて、郵船會社の倉庫のみ猶間近う、實にやこゝに出で入りの誰もく、心地よく思はるゝは、この建物ぞかし。

金文字のNYK、いでゆく時は遠くまで、入り来る時は、まづかゝりやきて送り迎ふ。今も朝日にまたゝくやうにて。

上海にむかへる浦東、入り船のまゐるしの旗かゝぐるやぐらたてるあたり、何とかいへる工場あり。田舎屋ところどころ、楊も蘆もたゞ青う一目に、馬羊さては水牛の群こゝかしこに遊べる、晝にもかゝまほしきや。大船

小船いりつどへる間をぬひて出づれば、吳淞。濁浪空  
につらくかとはかり。

## 驢

絶えずものに追はれたるやうなるさびしき足音、夕暮  
の色に消えて、あやしき嘶きの聲もあはれなる驢のむ  
れ、町はづれに見たるあはれ深し。やゝ細長き米の袋  
一つ一つ背に載せて、馬子に引かれ行く、先なるを追ふ

八匹九匹、一すぢの綱も無けれど、道も違へず、先なるが  
やすらへば、續く八匹九匹の驢もやすらふ。狭き城内  
の石敷ける道、行きあふ轎子の先を拂ふにあへば、つゝ  
ましくかたよりて歩みつゝ。

南京は明の孝陵に詣でつる時、雨しめやかなるに、石人  
石馬濡れて立つ野の静寂、かの淋しき足音にとぼく  
とたどり行けば、云ひ知らずあはれに、おもひ胸に満ち  
て、荒れし都の跡とばかり、幾百年後の世なる外國より  
の旅人も、そゝろに涙ぐまし。乗り捨て、詣づる程雨  
ふりまされば、傘さしかけての歸さ、實に驢ならでは風

雅ならじ。

薪すこしつみて、煙管を杖に翁引き行く、橋など渡りたるを遠くより見れば、さながら晝の心地ぞする。

相知れる沈氏といへる人、いつも年賀の折、愛兒ともなひて來まし、が、幼き人には、紅に浮紋ある縹子の上着つけさせて、まろく美しき驢に鞍置き、鈴つけて乗せたり。鞭をわけて、父の沈氏が轎子のあとに従ふうしろで、辮髪も未だ肩過ぎたるばかりなる愛らしさ。かくて、年毎にたがはず來ませば、年の始の客人の第一に數へつゝ、誰も誰も彼の嘶きに走り出て、鈴の音をこそ待

ち迎へしか。かの兒も大人になりまし、なるべし、今は驢に乗るや乗らずや。

### 紙錢

磬の音あはれに、慟哭の聲野末を遠く遠くなり行く。喪服着たる人も少く、供の一人が持たる紙錢のみ夕日にきらめく。靈なきむくろをいづこに捨て、歸るやらむ、誰も同じ様に土に歸るつひの世の門出さまへ

なる中にも、この國の貧しき人のやうなるものはあ  
らじ。目なれては何ともなければ、すこし街より外に  
そゝろ歩きして見ませ。いづこにも柩のすてられた  
る、沼の様なる所の塵塚にさへ、古きは雨に朽ちて蓋す  
こしあきたるなど、夜は鬼火燃ゆらむ。瓦屋根して小  
さき家づくり、窓一つ開けて入れたるは、さまでならぬ  
人のなるべし。同じ形なる小さきを添へたるは、子な  
ど持ちたる女のあとならむか。兆豊路といふ處に住  
みし時、表は大路砥の如く、馬くるま往來絶えず賑はし  
かりしかど、裏は廣き野原なりけり。雨しめやかなる

夕べなりき、常は閉ざしたる小さき窓ふと開きたるに、  
人丈ばかりなる程を、ふはくと燃えて又消ゆる火の  
青さ、人の行くとしもなきにと、よく見てあれば、又ふは  
ふはと燃えて、今度はすこし上になりぬ。鬼火よと思  
へば、頭より水かけられたる様にて、身の毛いよ立ち、わ  
れ知らず窓の戸はたと閉ざしぬ。誰にもいはであり  
しに、又の夜、ボーイ顔色かへて、彼の窓の外指さし、鬼火  
鬼火といふ。たがはざりけりといと、恐ろしくなり  
て、夕暮よりその方の窓は開かぬこと、定めつ。晴れ  
たるおした、例の柩のあるにこそと思ひて、廻り道して

行きて見れば、垣根に近う、かの窓の下にありけり。動かしたる様にて、蓋すこしあきたり。白骨のまざくと見ゆるに、あなやと走りかへりぬ。其夜の恐ろしかりしこと、またの朝、人聲近う聞ゆれば、例の窓すこしあけて見るに、人あまた居て、彼の朽ちたるを新らしき椀とかへて、やがてかき行きぬ。紙錢やきたるは、亡き人の爲なるべし、ほそくと未だ烟の立ちのぼりたる、いひしらず寂しうあはれなり。其後は、雨の夜もことなかりき。やがて草切りはらはれて、大きな家を建ちつゝきたる。今は人多く住みて、更くるまで燈火の光

賑は、しとこそ聞きしか。

### 旅よそほひ

身を雲水の僧の一杖一笠、旅よそほひの手軽なるは、世を捨て人の上なればぞかし。この國の大官など、旅する折々の荷物、のさても事々しや。乗り物寝臺はもの數かは、彼の李中堂は、歐州に旅せし時、棺をさへ持ちまはりたりとぞ。さるきは、はあらで、是はいと身の

程かるきあたり、日の本ならば革の手さげに柳行李といふいでたちをいかにといふに、くるくると巻きたる棕櫚の吳塵の中には、紺地に白くぬきたる唐草模様、うすくなえたるは、雨の日に仕舞忘れし煎餅のやうなる蒲團一枚、赤き切れにて製りたる枕一つ、心には菊花とても入りては居るまじ。是にて幾千里遠き旅寢を、かしはといふものになりて、夢はいづこに通ふらむ。外に籃子カゴ一つ、その中には、箸茶碗はいふもさらなり、鏡も履も、手洗鉢も、手巾、脚巾、しほらしきは書二三冊、筆墨のたぐひ迄入れたり。着換の下着は底の方にをさめ、雨

傘、雨履まで一切をとりて、此一かごにきつと引きまめたる、網の目をもりて、丸きは丸なりに、長きは長なりに、遙々の旅路を主人の御供つとめ顔なり。むかしく禹といふすぐれ人の、水ををさむとて、三年家門を過ぎて入らざりきとぞ。そはこのやうの御荷物にてはあらざりしならむも、なりはひの爲には、今も三年はおろか十年二十年家門をくゞらぬ人珍らしからず。さればこそ商ひに勝れたる人の多きなめれ。一つは旅をもものともせぬ性質にもよるべし。さても面白の旅よそほひや。

## 水棹

追風待つ舟の泊りのつれづくに、同じやうにかゝれる  
隣の民船さしのぞく。ともの方所せきあたりにかり  
そめの調度ものわびしう見ゆれど、未だうら若き女の、  
日當りに出でて髪結ふあり。鶏の聲岸近き畑より聞  
えて、汀の芦も未だ冬枯のさま見え、鶯鳥のさし伸ば  
すうなじに、秋風静に吹いて、いひ知らずのどかなり。  
折しも何としけむ、凧笛のしるべも無く進み來る小蒸  
氣船、足も沈むばかり、豆粕つみたるを數多引きて通れ

ば、たまらず波にゆられてかたよる隣の舟、あなやと思  
ふ間に、彼の舟に打ち當る。女はと見れば、くしけづり  
居たる緑の髪とり上ぐる間もなし、つと立ち上りさま、  
水棹とりあげ、小さき足にもこもる懸命の力しかと踏  
みしめて、向うの舟をさゝへぬ。舟底に眠れる男の、人  
聲に走り出し時は、既に安し。女はほと息して、紅さし  
たる頬のあたり、嬉しさをつゝみて、残る煤烟を見送り  
居たり。活々したる其面、時の間の働を語りて、云ひ知  
らずめでたうこそおぼえしか。

絶句

日清の役の頃なり。高見微笑といへるひとありけり。支那の僧侶に機をかへて内地に深く入りまし、が同志の士と共にとらはれて、霽波なる普陀山より、杭州府に護送せられ、清波門外にて銃殺の刑に處せられたる時、白き下着の背に、最後の詩ぞしるされたる。

此歳此時吾事止 男兒不復說行藏

蓋天蓋地無端恨 附輿斷頭機上霜

敵ながら、日の本の志士が最後のあはれにめでたきを、

時の知府いたく感じて、懇に葬りつ、武士が形見の衣ぞとて、おろそかならずや保ちけむ、國のよしみ舊にかへりし後、公の司を経て、ことよしを細かに傳へ、日の本に送りおこせけり。其拵のこととか知府は、箱にをさめたる衣、明日は渡さむとて、夜もすがら香をたきて別を惜みつ。あけがた少しまどろみたる夢に、まさくと亡き人現はれて、懇に別を告げけりとなむ。やさしき武士の道は、いづこもかはらざりけりと、聞く人涙こぼさぬはなかりき。



## 莫愁

磨かねど玉の光はおほはれで、湖添の畑に桑摘む少女、  
 いやしき手わざもいたはしう、名も無き人の子なれど  
 も、天の成せる麗質玉の如く、花盛匂ひこぼる、十五の  
 春、村の若人が切なる戀もあだにして、並びなき長者が  
 一人子におもはれつゝ、昨日にかはれる今日の身の幸、  
 頭上金釵十二行、足下絲履五文章、珊瑚のかゝみ桂蘭の  
 室、日夜をわかぬ逸樂に、湖の緋鯉も嬉しとをどりて、憂  
 ひと云ふもの知らで過としぬ。盧生の夢も人の世も、

水鳥の浮寝の床のさめやすさ。鴛鴦の契りこまやか  
 なりし二人が中になさけなきは戦といふものなりけ  
 り。某も時の王に召されて出づる勇ましの首途、さる  
 にても花の妻木にいかばかり、心引かれてかへりみし  
 けむ。

春の夜の暗あやなくなりて、涙に明し暮せば、君と別れ  
 し思出ぞ盡させぬ歎なる。夏にもなれば、明け安き夜  
 をかこちし舟遊、漕ぎぬでて今は一人をうつす湖の深  
 さうらみは、秋ともなりて、み空を渡る雁がねも遠征の  
 夫が便りはもたらさず。かくて冬さり春くれど、そよ

との風の音づれるもなし。もしやと思ふ望みの糸絶えてはいよ／＼涙に幾年月ものゝふは草むすかばねとなりはて、夢やは通ふ紅閨のうち。薄命なる美人の操をわはれびて、後の人其名を取りて、莫愁の湖と名づけ、住居せし高樓なほ存して、鬱金堂とぞいひ傳へたる。

### 湘君竹

天の下知ろし召し、御力もすべなしや、民のさま見させむの狩の途中はかなくも蒼梧の野にて崩御をしを

しぬ御病あつしと都に早馬の使ありし日、とみに旅だたしてはる／＼途を急がし、が甲斐なくておくれさせしきさいの宮の御歎き申すも畏こし。太妃を娥皇小妃を女英ときこえて、先の帝堯の姫宮なり。御かたちありさまより初めて、御心ばへ美しく、深宮の中をさまりて、御代の春とこしへにおはしませすべかりしを、かゝてはらからの宮は、洞庭湖中の君山といふに御庵ひすびてあけくれ帝を去のびつ、御喪にこもらし、春秋のいかにあはれなりけむ。御涙は凝りて湘竹に斑をなしつ、うきふしを後の世までぞかたり傳へたる。

天心閣

岳麓の紅葉大かた落ち盡しつる頃なりき友の案内に  
て天心閣に例の轎子に乗りて薄暗き道をたどりやが  
て城壁にのぼる。湘江の水白うして氷陸洲も長沙の  
街も暮れはてたり。風の音おはれは見る影も無き兵  
營の窓を音づれて手づくねのかまどに煤びたるつる  
鍋掛けてうづくまり居る兵士のやせたる顔もゆる火  
にはと見えてまた烟にぞ隠る。昔の葉さやくと  
音して足音にたゆるさほろぎの聲も物さびしき路な

り。關門まうげたる處に至れば轎夫聲高にいづこの  
館誰々と云ひて開けさす。城壁の中心とも云ひつべ  
き處に高樓あり。白きひさしの内わたり晝かきたる  
壁宮の屋根めきたる瓦の形もをかしきに彫刻したる  
欄干月見むにはこよなき處なり。廣き室に燈火只一  
つ二つある桌の一つを取り圍みてものがたりす。風  
少し立ちぬ今しのぼる月に雲やがとると友の云ふに  
立ちて窓を推せばあなや燈火消えぬ。ありつるより  
も明ら雲間よりもれ出でし光人をめだたがる。遠く  
は岳麓の峯氷陸洲さでは黄金の波こきわけて行く小

舟、近くは街の家並、ところどころの森、某廟、某寺、それらをうねうねとめぐれる城壁、目を落せば樓門のほとり、乗り捨てたる轎子のさまもいひしらずをかし。月空とともに高う、更けてはいよ、興もまざりて。

### 蜜柑畑

水陸洲とは、岳麓山と、長沙の街と相向ひたる中を流るる湘江のたゞな、密柑多き中洲なり。朝霧の間より

ほのくくと見ゆるは、いふも更なり。夏は夕暗に螢の飛び交ひたる、向ひの愛晩亭に夕日残りて、江は暮れ渡れる夕もやに、月まつほどの詠めとりくくなる中にも、興あるは冬の頃の密柑畑なり。木の葉落ち盡して、梢の鳥の巢もあらはに、木がくれなりし賤の伏家もそこと知らるゝに、黄金色したる實の枝もたわゝになりたる岸のほとり、小舟の中には小春日こゝちよう背にうけて、翁ねむりをり。畑には十ばかりなる童の、手に手に棹持ちてうち落すもあり。拾ひて籠に満たすもあか。このあたりの畑、大方は誰々の持ちぬしとありて、

客人ある折々小僮して、舟出さしめづき、かくはすなり  
と聞く。霜白うなるまゝに、黄金色は紅になりていよ  
よ美しう、花などの咲きたるやうなり。清き汀の小石  
ふみつゝ行けば、日本にある心地をする。いかでこ  
の洲一の領じて、いやが上にも密柑畑つくり、年々にか  
ぐの木の実を枝ながらして、かじこさあたりによらば、  
離れ洲のさびしき住居も尊と、かちましなど。

開福寺

長沙の街はづれ、湘江のほとりだ、開福寺といへる禪寺  
あり。相知れる日の本の法師のをこぼ錫杖といめて、  
祖國よりはるく、花の種などとりよせつゝ植ゑいま  
すと聞きしかば見にゆく。秋雨じめやかなる日なり。  
街を出でしより真菰みたるゝ沼づたひゆきくゝて一  
むら竹の生ひしげれる處は山門あり。正面には、そび  
ゆる堂、落葉うづ高き兩がには、禪房とまゑるされたる  
があり。法師いで迎へらる。霜たうつろひ残れる菊

をはじめ、廣き境内案内せられて見あひく。雨降り交  
 されば、設けの舟遊びにせん、いざたをへとて、今度は庫  
 裡の方に、人もわれも傘うちかたふけて走りきたがふ。  
 裏門に近きところ、孟宗竹雨にまだりて、破れたるばせ  
 を葉のさはく、と音するあたり、見れば舟の形したる  
 はなれ屋あり。招ぜらるゝまゝに皆のりうつる。池  
 にむかひたる小さき窓開きて見させ、碧浪湖の眺めを  
 とほゝゑる。實にや桌も椅子も舟中のそれにて、い  
 とをかし。まして碧浪湖にたぐへし池のさゝ浪、よる  
 よるの月には清興いかばかりならむと、誰もく心す

みて、折から來まし、笠雲禪師とともに、小笹にそゝぐ  
 雨の音を聞き暮らして、火ともし頃までを語らひたる。

詩牋

父上赤い紙を頂戴黄ろいのもと、小椽傳ひに書齋に行  
 けば、書讀みふけり給ひし時も、將た文作り給ひし時に  
 も、必ず、切りくだくのでは無い、字を書いて見よと、書棚  
 より詩牋とりおろし、二三枚賜はりき。姉上は未だ學

校より歸りまゝ、晝靜なる家の内、母上が居間に縫ひ物します傍に、遊びあきてはいつも。父上其頃より深く思し決する處ありて、城下を離るゝ十里、藩祖芳烈公の築き置かれし閑谷巖を再興さむとて、山に入りましぬ。やがて家を舉て移し給ひしは、我いとけなき時なり。流車の未だ通はぬ程なれば、車にて國道をわれば、父上のお膝に載せられて行きぬ。和氣川の渡しに初めて舟といふものに乗りにて、魚が居りますと舟べりに清き流をさしのぞき、それをあふないと父上に抱かれし。四方の山青葉は暗く、雨かと思ふ

谷川の水の音も寂しき夕暮、石門に着きて數多の人に迎へられ、もの心細き夜を住み馴れぬ家に入りて、父上は一人心地よげに、集ひ來まし、教師の君たちと談りよかし給ひき。

父上の初めて支那に渡りまし、時のこと、か未だ公のゆるしなきを、二三の士と相謀りて、ひそかに舟出した。父上御歳二十ばかりなりき、もといり結び、大小腰にしたるまゝ、楊子江の濁浪に驚かざりし身も、船暈には苦しみつ、吳淞より徐々と上海に夕暮のけしき盛なる、千舟百舟の燈火陸にもつゝ、繁華のさま見し時の

おもひよとて、からくくと笑ひ給ふが常なりき。再は天津に。其折は母上も子等も、やがてかの地へ呼び迎へ給ふ御心組なりしに、ゆくりなく病を得ましつと聞きぬ。その後まばしがほど國事にたづさはり給ひしかど、志ならねばとて、人の惜しむ榮達を自ら捨て、山中に、そは我が初志を傳へむ人をつくる爲ぞと、折にふれては洩し給ひき。えにしありてわれこゝにゆき、の身となりし時よ、父上の御喜び、あゝ父上の御喜び、それも昔の夢となりぬ。あはれ赤い詩牋に今も字は得書かず、見る度に思ひ出の涙こそ盡させぬ。

## 花

貴きも賤しきも、なべて花めづる心のやさしさ。秋になりて桂花かをる頃よ、女はかざしに行きあふうつり香ゆかしう、轎子には小さき掛花いけに、乗り居る人の袂ぞかをる。つゝれまるとへる苦力が推し行く小車にさへ、一枝をはさみたる、嬉し。

花は龍華の桃、長沙の躑躅、杭州は孤山の梅ぞ殊にすぐれたる。過ぎし年師の君のこゝに來まし、時、いたく賞で給ひて、詩の友に分たむとて、一枝小がめにさして、



はるく、日の本にもたし、ことあり。古も今もかはらぬ風雅を、林處士の芳魂も、地下にはほゝゑみてやありけむ。

四川は古の蜀、娥眉山には櫻ありと聞けど、未だえ行き見ず。いかで一度はと思へど、よきついでもなし。今年とつぎて蜀に入りし友よ、花の便りをおくり給ふやいかに。

(終)

思の水たゝひてひろくゆたやかに、洞庭の湖のひろくゆたやかに  
支那の海あらしき波間をかきわけて拾ひとりけむこの眞白たま  
遠々しみんなみ支那の山ら川らまつろひ  
伏しぬ彩筆の前に

石 樽 千 亦

なつかしき御心からにつましけむやさし  
く清くあえかなる花

うつくしきたま手に成りし書見れば女て  
ふ名もはえありと思ふ

片山廣子

白岩艶子ぬし、年頃清國におはして、景色こ  
となり風俗變れるその國に、見たまひ聽き  
たまひける事どもの多かるを、たゞ自らの  
興にのみはとゞめおきたまはず、折々にか  
き記したまへるが、いみじき御筆の走りは  
をかしき彩をなして、こゝに清らかなる一  
卷の書とはなりぬ。舞姫をのせたる轎子の  
ゆきかふ四馬路の夜景、珍らしげなる彼の

國固有の演劇、さては楊柳の蔭をゆるく行  
く水、夕靄の中にいなく、驢馬の聲、風俗に  
つけ風景につけ、古く大きやかなる國柄の  
たふとさは、今も猶昔おぼえていかにゆか  
しう残るらむ、かの倫敦伯林わたりにも見  
らるべきか、はと、御書を讀みをはりて思ひ  
つづけつゝもかくなむ。

大塚楠緒子

明治四十三年四月七日印刷  
明治四十三年四月十日發行

非賣品

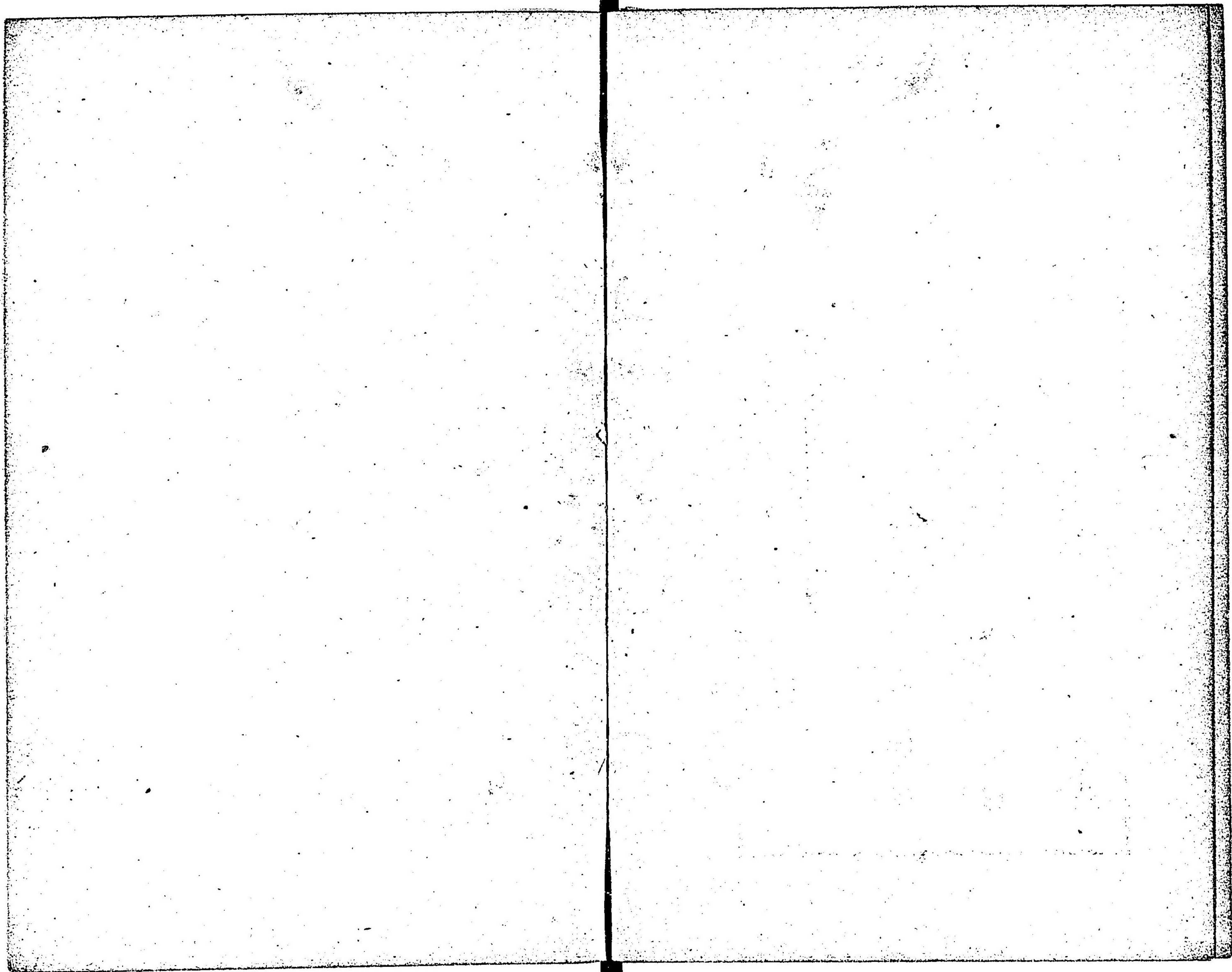
編纂者 白岩艶子

印刷者 中野鏌太郎

東京市京橋區築地南小田原町二丁目九番地

印刷所 東洋印刷株式會社

東京市芝區愛宕町三丁目二番地



72  
435

